

つけられたいくつもの名前

——李良枝『由熙』をあとがきから読み直す——

寺下浩徳

立命館大学先端総合学術研究科に所属している寺下です。今年3月から韓国の大田市にある又松（ウソン）大学で日本語教師をしています。李良枝の作品に対しては、私自身がいま韓国で、同世代の韓国人の学生たちに日本語を教えているということもあり、強い関心がありました。今日、取り上げる李良枝の『由熙』という作品のなかにも、由熙が叔母さんに日本語を教えてほしいと言われるのですが、断る場面があります。このように日本語に対する複雑な感情は、全集に収録されている他のエッセイの中にも表れており、「日本語に何度も反撃されなければならなかった」という記述もあります。このような記述に表れる日本語に対する李良枝の感情は、自分がいま韓国で日本語を教えることによって暮らしているという現状のなかで、どのように受け止め、捉えなおすことができるのだろうか、気になる問題でした。そういった関心の延長線上で、今回、李良枝の作品を読み直しました。原稿を用意したこともあり、今日はその内容に沿って報告したいと思います。

つけられたいくつもの名前——李良枝『由熙』をあとがきから読み直す——

いま改めて『由熙』を読み直す。父や母が、もしくは自分が愛し、親しみを覚える人びとから呼ばれる自分の名前。そういった名前を名乗り、それがまわりの人びとに受けいれられ、受けとめられるということ。その一方で、養子が養育先で、慣れ親しんだ名前とは異なる名前をつけられたり、侵略国がひとりひとりに名前を改名させたり、ホスト社会がその社会のマジョリティーの言語で呼び名を強いるという暴力がある。

今回、取り上げる小説『由熙』には、さまざまな名前の表記が登場する。ふりがなのない漢字表記の由熙、カタカナでユヒとふりがながつけられている漢字表記の由熙、そしてカタカナだけの表記のユヒ。その上で、今回の発表で取り上げる李良枝によるあとがき「言葉の杖を求めて」には、韓国語表記の「유희 (ユヒ)」も表れる。

では李良枝は、いくつもの名前の表記を書き記すことで、いったい何を意味しようとしたのだろうか？

今回の発表では、異なった表記で表れるいくつもの名前をめぐって、ユヒを受けとめるホスト社会の問題を考察する。この小説に即して述べるならば、日本・韓国の両社会は、由熙をはじめとした在日朝鮮人の存在を、どのような視線でまなざし、また、どのような名で読んできたのだろうか？本発表では、小説『由熙』のあとがきに注目し、日本社会、または韓国社会の問題を考え、両社会に根強い単一民族思想の暴力性を捉え返したい。

日韓両言語によるあとがきの経緯

1988年に文芸雑誌『群像』11月号に発表された李良枝の小説『由熙』は、翌89年1月に第100回の芥川賞を受賞したこともあり、同年2月には日本・韓国の両国で、同時期に単行本として出版された。しかし日本語版とは異なり、韓国語に翻訳された『由熙』には、李良枝によるあとがき「言葉の杖を求めて」が付されている。この「言葉の杖を求めて」は、李良枝が書いた日本語原稿を韓国語版の訳者である金ユドンが翻訳したものである。一方で、日本語版の「言葉の杖を求めて」は、李良枝の没後になってからようやく、安宇植氏が、韓国語から再度、日本語に訳しなおし、『李良枝全集』に収録した。その経緯は、『李良枝全集』解題によると、李良枝の日本語原稿が残されていなかったためである。

本発表では、このあとがき「言葉の杖を求めて」を中心にみていくことで、『由熙』を改めて読み直していく。

「言葉の杖を求めて」をめぐる

まず、「言葉の杖を求めて」の一部分に関して、韓国語版、日本語版の同一箇所を順に引用する。

한마디로 하면 나는 나 속에 있던 「由熙」를 매장하고 싶었던 것이다. 「由熙」를 버리고 「유희」를 나 자신이 넘어가지 않은 한・・

유희는 「아」와 「아(아)」 사이에서 말의 지팡이를 잡지 못해 고민하고 결국은 일본으로 돌아간다. 그러나 나는 이제야 이러한 「유희」, 즉 나 속에 있던 「유희」와 결별하며・・

一言でいうと、私は自分の中にあつた「由熙」を葬り去りたかつたのである。「由熙」を捨てて、「유희」を私自身が越えていけない限り・・

「由熙」は「아」と「아」の間で言葉の杖をつかむことができなくて、思い悩み、結局は日本に帰っていく。けれども私は、ようやくこのような「由熙」、つまり私の中にもいた「由熙」に別れを告げ、・・

私は、このあとがきに関して、その内容とともに、李良枝の言語使用に注目したい。つまり、韓国語版、日本語版の双方に見られる括弧で括られた漢字表記の「由熙」、括弧で括られた韓国語表記の「유희」という二重の表記の使用である。

それは、韓国語ならば韓国語表記の「유희」、日本語ならば漢字表記の「由熙」だけで統一してしまうような翻訳の作業を意図的にずらすように、二言語による「由熙」をあえて併記するという李良枝の言語使用のことである。

内容に関しても、李良枝は、「由熙」を葬り去りたかつたと述べ、「由熙」を捨てて、「유희」を越えていき、自分のなかにあつた「由熙」に別れを告げると書いている。

では、李良枝が葬り去りたかつた「由熙」、別れを告げる対象としての「由熙」とは、いった

い何だったのだろうか？

小説中において、由熙は、自分の体に染み付いている日本の生活習慣・文化様式で韓国に接することで、どうしても韓国になじむことができず、反発を覚え、苦悶する。それは言語においても同様である。日本語の本を読み、ある時は日本語で朗読し、別れに際してオンニ（お姉さん）に預けた448枚の日本語で書いた原稿用紙。それは由熙が自分では、「棄てられなかった」と述べるものなのである。李良枝が捨てようとしたものとは、由熙の身体に染み付き、棄てられなかった「日本」、または「日本語」ともいえるようなものではなかっただろうか。そういった理解のもとで、あとがきを読むとき、括弧で括られた漢字表記の「由熙」とは、「日本」・「日本語」が染み付いた日本語読みの「由熙（ゆき）」ともいえるものではないだろうか？この点をふまえて、以下、括弧で括られたふりがなのない漢字表記の「由熙」を、日本社会において、多くの日本人が呼ぶように「ゆき」と呼ぶことにしよう。

それでは、次に続く「유熙」を私自身が越えていく、というときの韓国語表記の「유熙」が指し示すものを、改めて考えよう。

そのために、ここでは、括弧で括られた漢字表記の「由熙（ゆき）」と、括弧で括られた韓国語表記の「유熙」のいずれにも対置可能なものとして、ありのままの個人を指し示す、括弧を使わないカタカナのユヒという表記を措定してみる。

この小説が「母語」と「母国語」、「祖国」と「母国」といったあいだの分裂を描き、それらの関係性を鋭く問い返したものであることは、いままで多くの論者が指摘してきた。この捉え方が注目する論点を、あとがきに即して再度述べるならば、括弧で括られた漢字表記の「由熙（ゆき）」と、括弧で括られた韓国語表記の「유熙」とのあいだにある相剋であり、葛藤だといえるだろう。

その葛藤とは、ありのままの個人としてのユヒを、常に日本社会は、マジョリティーの言語である日本語読みで「由熙（ゆき）」と呼び、在日朝鮮人という括弧で括るよう疎外してきたのだといえる。同時に、韓国社会においても、ありのままの個人であるはずのユヒを、常に「同胞」という名のもとに、同じ括弧で括るよう、韓国語表記の「유熙」として認識してきたといえるのではないだろうか。

このユヒの生き難さは、日韓両言語の「あとがき」だけでなく、小説の本文中にも示されている。たとえば、オンニが、ユヒが韓国にいても日本語を手放さないことを、「日本語を書くことで、日本語の文字の中に、自分を、自分の中の人に見せたくない部分を、何の気がねも後ろめたさもなく晒していた」のだと解釈しているところなどはまさにそうである。同時にユヒ自身もまた別の場面において、ソウルの岩山は、韓国や韓国人を象徴しているように、「いつも曝け出している」と述べている。それは韓国に来てまでも、日本語にしか自分を「晒す」ことができず、韓国人のように「いつも曝け出すことができない」という自分の不自由なありかた、生き難さを示唆しているのだ。

つまり、ありのままの個人であるユヒは、どこにいても同じユヒそのものであるはずなのだが、日韓両社会はそのようなユヒの存在を認めず、自国の認識法にしたがって、その認識にふさわしい振る舞いを強要しているといえるのだ。

以上で考察しようように、括弧で括られた漢字表記の「由熙（ゆき）」、括弧で括られた韓国

語表記の「유희」をめぐる李良枝の言語使用とは、多様な水準の相剋と葛藤を表している。それは、ありのままのユヒを在日朝鮮人として括弧に括ることで、疎外し、「由熙」(ゆき)という名で呼ぶ日本社会の暴力性、一方でユヒを「同胞」の一人として囲い込み、韓国に溶け込む努力や同質性を強要する韓国社会の暴力性といえるものである。

しかしこの小説の奥行きとは、以上の論点がユヒ個人の水準だけでなく、オンニのユヒに対する他者認識のズレとも重なり合っているところにあるといえるのだ。

それは、中心的な語り手であるオンニの身体が、ユヒとの関係において痛み、痺れを覚えるということである。その身体の変容にいたる、オンニのユヒに対する他者認識のズレとは、オンニが見ていたはずの括弧で括られた韓国語表記の「유희」が、結局は、日本から来た括弧で括られた「由熙(ゆき)」にすぎなかったというズレである、しかしオンニは、そうした自分の他者認識を、いまは不在であるユヒを目の前に想起するなかで問いたただすのである。それは、自分の体に痛みや痺れをもたらすのだが、その痺れとは、括弧で括られた韓国語表記の「유희」とも、括弧で括られた漢字表記の「由熙」(ゆき)とも違う、ありのままの個人である括弧で括られていないユヒの存在を見てしまった衝撃によってもたらされたものなのだ。

このように李良枝の言語使用は、多様な水準の相剋と葛藤、齟齬と分裂を、相互連関的に描き出している。

そのうえで考えなければならないこととは、李良枝が、「由熙」を捨てて、「유희」をも超えていく」と述べることである。それは、日韓両社会に根強い単一民族思想を鋭く批判するとともに、いまもってなお、ありのままの一人の個人が、それぞれのものとして生きることができない現状を厳しく問いたただしていることなのだ。